

〈論文〉

青年期における自己主張と自尊感情との関連

—グループ学習に注目して—

吉森丹衣子

要約

本研究では、青年期のグループ学習における主張行動と自尊感情との関連について調査研究を行った。調査は青年期にあたる大学生、短大生、専門学校の生徒を対象に行われた。調査の結果、主張行動と自尊感情には中程度の相関が示された。また、主張行動の背景要因について自由記述による回答を元に分析を行った結果、自尊感情が影響していることが推察される要素と、自尊感情以外の心理的要因の存在が示唆された。

キーワード

青年期 自尊感情 自己主張 グループ学習 アクティブラーニング

問題・目的

文部科学省(2012)¹⁾の中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」において、大学教育における学びを「受動的な学習」から「能動的な学習」へと質的転換をすることが求められた。その手法の1つとして「アクティブ・ラーニング(以下AL)」があげられ、現在では多くの大学でALが取り入れられている。

ALは、文部科学省(2012)¹⁾によれば以下の様に定義される。

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」

ALを取り入れた学習によって、教育の質的変化が期待された。しかし、目的を達成するための手段として取り入れられたALは、一部で手段から目的へと変化し、本来の主旨である「質的変化」からずれた活動に繋がってしまった。文部科学省(2016)²⁾は、このような流れを受け「AL」という表現を避け、「主体的・対話的な深い学び」という言葉を使用しはじめた。

よしもり たえこ：淑徳大学 人文学部 助教

このように手段と目的を見誤りはあったものの、ALを用いた学習による効果も報告されている。木村ほか(2015)³⁾による、ALの視点に立った参加型授業の効果に関する調査では、ALの実施により「生徒と教員間のコミュニケーションの深化」や、「コミュニケーション力」、「考えを言語で表現する力」、「他者と一緒に学ぶ楽しさ」、「自分の考えを深める力」などの観点で効果が見られたことが示されている。

以上のことから、ALにおいては活用による効果は予想されるものの、単なるALの取り入れで終わらず、目的を達成しうる内容になっているかどうか、実施に際しては精査する必要がある。その際、注意すべきポイントを検討する上で図1が参考になる。

図1は、文部科学省の中部地域大学教育推進委員会が「産業界のニーズに対応いた教育改善・充実体制整備事業」として、ALの実施における問題点を明確化し、それらの対策を踏まえた講義設計を可能とするために行われた調査の結果である。この調査では、中部地域にある23大学が調査対象とされ、実際のケースをALの指導、評価、その他(カリキュラムや組織的取組など)の観点から分類し、問題点等を分析している。それらの分析を基に作成されたのが図1の「アクティブラーニング失敗原因マンダラ」である。

図1の内容から、ALの失敗における教員側の要因と学生側の要因が読み取れる。教員側の要因には、ALの理解、ALに対する認識、取り組み方、授業準備の問題に加えて、組織的な連携の問題が指摘できる。そして学生側の要因としては、個人の学習能力や意欲が問題としてあげられるだろう。これらのポイントが実施時における注意点として指摘できるが、筆者の経験から更に指摘できる点として、個人の心理的問題があげられる。

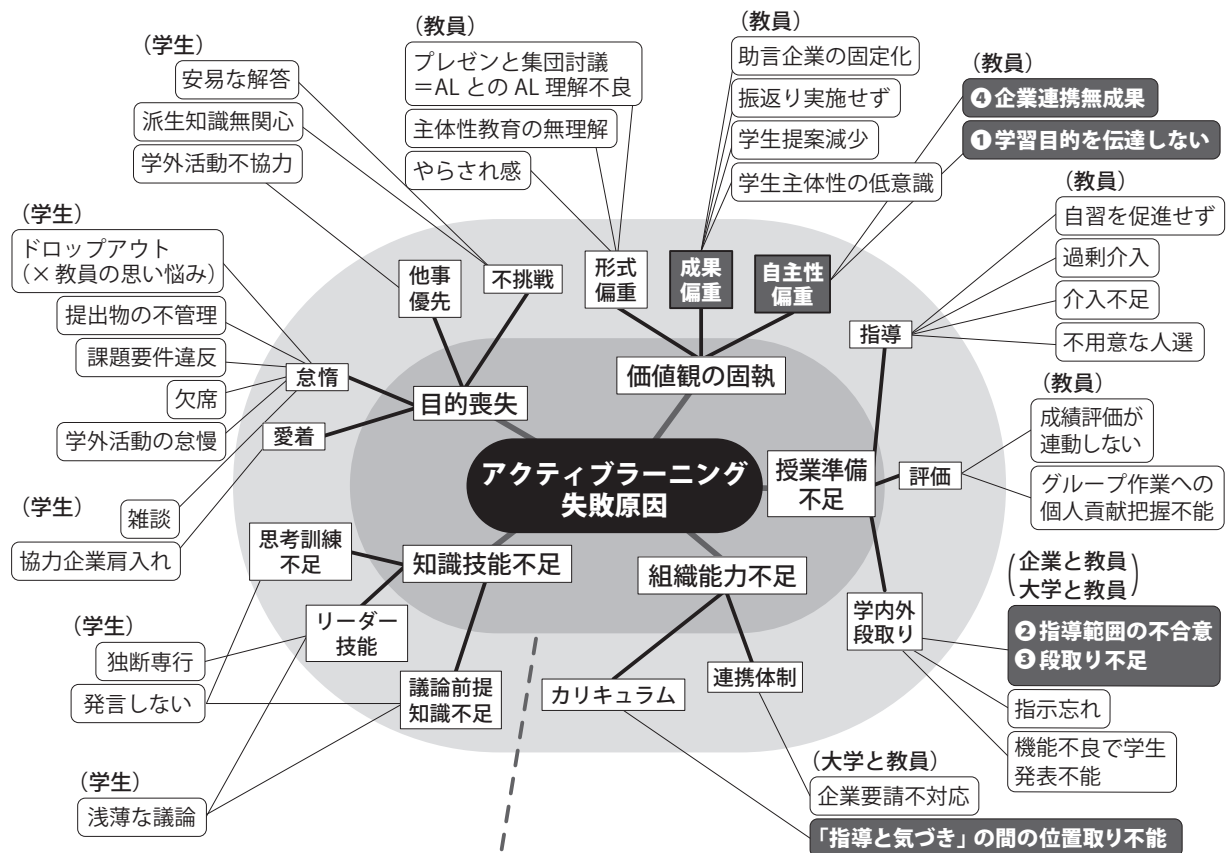


図1：アクティブラーニング失敗原因マンダラ

出典：「アクティブラーニングの失敗事例ハンドブック～産業界ニーズ事業・成果報告～」中部地域大学グループ・東海Aチーム(2014) p.3⁴⁾

例えば、図1の学生側の要因の1つとして「発言しない」という項目がある。この項目に関連する要因として図1の中では、「思考訓練不足」や「議論前提知識不足」が指摘されている。しかし筆者の経験では、学生本人のやる気や学習能力の高さがあっても、AL(特にグループ活動形式など)を取り入れた講義では発言等が見られない学生がいる。このような学生の背景には、「自信のなさ」が指摘できる。

そのため「ALにおいては学生の心理的な性質に関連している」という仮説が示唆される。また、学習場面における「発言」つまり意見を表明する行動(自己表現)は、「アサーション」として研究されることが多い。アサーションは、そのトレーニング方法が開発されており⁵⁾、企業や学校など幅広い分野で実践が行われている。しかし、その背景に社会生活におけるスキルの向上が主目的として置かれているため、学習場面に特化した調査、研究などは行われていない。そこで本論文では、青年期の学生、生徒の学習場面(グループ学習)における自己主張について、その背景にある心理的要因を自尊感情の観点から調査し、関連性を明確化することを目的とする。

調査方法

1. 調査時期：2020年9月上旬～下旬

2. 対象：私立大学1校(1年～4年生)と短期大学1校(1～2年生)、専門学校1校(1年生)で調査を行った。調査協力者は168名(男性：76名/女性：92名)

3. 手続き：調査は以下の手順で行われた。

- 1) 授業終了後に調査の目的、調査への協力方法、アンケートへの回答方法および注意点を教示
- 2) アンケートに回答するためのURLを学生に配布
- 3) 調査に協力してもよいという学生のみURLにアクセスし回答を行った

上の方法に加え、筆者が講義で使用しているGoogle Classroomの掲示を使用して、学生への調査協力の依頼を行った。掲示を使用した調査依頼の場合は、教示内容を掲示文面に掲載した。アンケートはインターネット上でのみ行われ、アンケートの作成においてはGoogle Formを使用した。

4. 質問内容

1) 自尊感情の測定

自尊感情を測定するために桜井(2000)⁶⁾が作成した自尊感情尺度を使用した。本尺度は、Rosenberg(1965)⁷⁾が作成した自尊感情尺度を、星野(1970)⁸⁾が日本語訳して作成した尺度を、よりわかりやすい日本語に表現を修正して作成されたものである。質問は10項目からなり、質問への回答は「はい」、「どちらかといえばはい」、「どちらかといえばいいえ」、「いいえ」の4段階評価から構成されている。

2) 主張行動の測定

主張行動について測定するため、金子ら(2010)⁹⁾のアサーション行動尺度と、玉瀬ら(2001)¹⁰⁾の青年用アサーション尺度を参考に、自己主張に関わる質問5項目を設定した。金子ら(2010)⁹⁾のアサーション行動尺度は、柴崎(1998)¹¹⁾のアサーションの定義を参考に作成されている。因子構造は「自己主張」、「他者尊重」、「客観的自己統制」、「説得・交渉」の4因子、12項目である。本調査では、12項目のうち自己主張因子に当てはまる3項目を使用した。

玉瀬ら(2001)⁹⁾の青年用アサーション尺度は、大学生、短期大学生、専門学校生、高校生など青年期の被験者を主対象としながら、カウンセリング領域における訓練や研修での活用を目的とした尺度である。本尺度は「関係形成」、「説得交渉因子」の2因子、16項目から構成されている。本調査では、最終的に作成された尺度から、話し合い場面を想定していると判断した質問を1項目、さらに尺度作成過程で使用されていた質問を1項目選択し、合計2項目を参考にした。

合計5項目に対し、本調査では「あてはまる」、「ややあてはまる」、「ややあてはまらない」、「あてはまらない」の4件法による回答を求めた。また行動の背景要因を知るため、各質問に対して設定された選択肢の選択理由について自由記述による回答を求めた。

結果

各尺度の記述統計の結果を表1に示す。

表1 自尊感情と主張行動の記述統計(下)

	M	SD
自尊感情	24.31	6.51
主張行動	14.03	3.82

自尊感情と主張行動の相関を算出したところ、 $r = .469$ と中程度の正の相関が見られた。図2に散布図を示す。

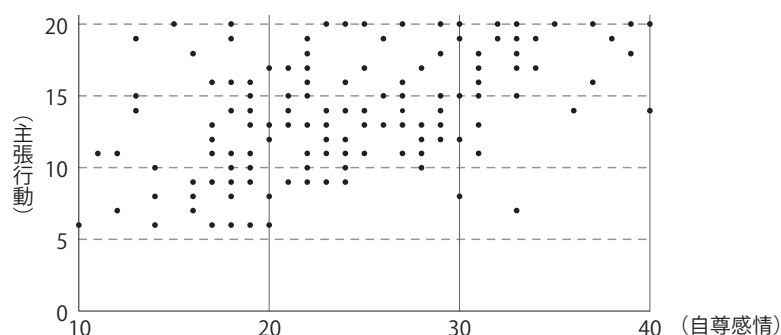


図2 自尊感情と自己主張の散布図(上)

- 4 自尊感情と主張行動の平均値を基準に、調査協力者を4グループに分類し、各グループの行動要因について定性調査を行った。グループの分類と、各グループの得点域、人数構成を表2に示す。

表2 自尊感情と自己主張のグループ分類(下)

	自尊感情(得点域)	主張行動(得点域)	人数
自尊感情(高) / 自己主張(高)	25—40	15—20	39
自尊感情(高) / 自己主張(低)	25—40	5—13	17
自尊感情(低) / 自己主張(高)	10—23	15—20	25
自尊感情(低) / 自己主張(低)	10—23	5—13	45

各グループの主張行動に対する自由記述をKJ法(川喜田, 1996)¹²⁾をもとに(1)カード作り、(2)カード集め、(3)表札作りの手順で処理した。各グループの分析結果を表3から6に示す。

表3の自尊感情(高)／自己主張(高)群においては11の表札が生成された。「自信」には、「自分の意見に対して自信がある」など自信に関するカードが収集された。「ルール」においては、意見することがグループ学習のルールであるという考えが書かれたカードがまとめられた。「価値」のカテゴリーでは、意見を提出することによって、何らかの変化が生じるという期待に関する考えがまとめられている。

「貢献」では、意見を出すことがグループまたは活動そのものを、よりよいものにするという考えが収集された。「低不安」においては、意見の述べる際に不安や緊張を感じないことが示されている。「経験」のカテゴリーでは、過去の経験、特にポジティブな経験から主張行動が形成されている、という主旨のカードが収集された。

表3 自尊感情(高)／自己主張(高)の分析結果(下)

表札	代表的なカード
自信	自分の意見にある程度自身を持っているから
	自信があるから
	ある程度、自分の考えや意見に自信を持っているから
ルール	一人一人が意見を発表すべき
	違うと思ったことははっきりと言うべき
	グループワークは意見を発表してそれをまとめて課題や結果を作っていくもの
期待	自分の意見を出すことでそこからどんどんいろんな意見に膨らませていける
	主張しなければ、何も起こらないと感じる
	自分の意見を聞いて考えが変わる人もいるかもしれない
貢献	意見を出したほうがスムーズに話し合いが進む
	グループワークの活性化のため
	相手に違う視点を伝えることでお互いに発展した学習をしたい
低不安	緊張しない
	意見を言うことに恐れがない
	意見を言うことにためらいがない
経験	今までの経験から話し合いで意見を言うのは比較的得意
	今までの経験
	違う意見を聞いて自分が助かったことがある
信頼	周りの人との信頼関係が築けている
	相手を信頼している
	反対意見を言っても他の人たちが受け止めてくれると思っている
回避	話し合いの場ではなるべく妥協したくない
	自分の意見を言わずにあとで後悔したりするのが嫌
	正直に話した方がトラブルになりにくい
欲求	自分の意見を相手に伝えたい
	自分の意見を主張したい
	自分の意見を言った上で互いに納得する結論を出したい
意見そのものの肯定	他人は他人、自分は自分と割り切っている
	人それぞれ違う意見があるため
	いろんな意見を聞き話し合えばよい
前提認識	意見をぶつけるための話し合いだ
	さまざまな意見が必要な場面だから
	グループ学習では、それぞれが意見を出し合うことが最も重要な項目であるから

「信頼」は、主張行動は単に個人の要素だけではなく、主張行動を可能にするグループ環境がある、といった内容がまとめられている。「回避」では、意見を言わないことで生じるデメリットを回避しようとする記述が集められた。「欲求」には、意見そのものを主張したいだけではなく、意見を提出することで、よりよい結果を生み出したいという意見がまとめられた。「多様性の受容」においては、そもそもグループ活動の前提として様々な意見、主張があることは当然であるという認識に関するカードが収集されている。最後に「前提認識」では、グループ活動を行う前提として個人が考えている内容をまとめている。

表4の自尊感情(高)／自己主張(低)群においては、10のカテゴリーが生成された。「ネガティブな反応予測」には、自分が意見をのべることで周囲から否定的な反応を返されるのではないかという不安や恐怖について記述されたカードが収集された。「自信のなさ」には、意見そのものをいう勇気や自信のなさに関する記述が集められた。

「他者との同調」においては、自分の意見を貫き通すことや、異なった意見を示すことよりも、他者に同調することで、その場を乗り切ろうとする内容のカードがまとめられた。「他者尊重」では自分の意見以上に他者の意見の方が正しい、または尊重すべきであるという考えが収集された。「消極性」においては、

表4 自尊感情(高)／自己主張(低)の分析結果(下)

表札	代表的なカード
ネガティブな 反応予測	自分の意見を言うことで周りはどう反応するのかなどを考えすぎる
	否定されるのが不安
	自分の意見を言って他人を不快にさせたら嫌
自信のなさ	自分の意見を整理できていない
	周りや反対の意見を言う勇気が無い
	相手から反論された場合に言い返せない
他者との同調	他人任せ
	大体の人の意見に合わせるのでもいいかなと思う
	他の人の意見に合わせてしまう
他者尊重	自分の考えより、人の意見を正しいと思う
	周りの意見を聞くと、周りの意見を尊重して自分の意見を言えない
	自分の意見を考え直してしまう
消極性	どうしても消極的になってしまう
	めんどくさい
	グループワークをするのがあまり好きではない
配慮	自分のためにグループ学習を止めてしまうのが申しわけない
	円滑に物事が進む
	なるべく話し合いを円滑に進めたい
準備不足	しっかり自分の意見を整理して話したい
	まとめられない
	自分の意見を整理できていない
苦手	積極的に意見を言うのが少し苦手
	意見の主張をするのが苦手
意見の価値否定	圧倒的に多いと自分の意見を言う必要が見いだせない
	自分の意見を言っても多数決で負けているので意味がない
恥ずかしさ	人見知り
	人前でしゃべるのが恥ずかしい
	恥ずかしい

グループ活動そのものに対する否定的な態度、消極的な態度が集められている。

「配慮」においては、話がまとまること等を優先し、自分の意見を提出しないことを記載したカードが集められた。「準備不足」は、本人の意思とは関係なく、意見を主張する準備そのものがない、という内容が収集されている。「苦手」においては、主張することそのものに対する苦手意識が記載されたカードが集められた。「意見の価値否定」においては、自分の意見を述べるのが、グループ活動の状況によっては価値がないことを示す内容がまとめられている。最後に「恥ずかしさ」は意見を述べることにに対する率直な恥ずかしさに関する記述を収集した。

表5の自尊感情(低)／自己主張(高)群では11のカテゴリーが生成された。「望ましさ」では、意見を主張しておいた方が良さだろうという、主張行動に対するやや消極的な取り組み方に関する内容が収集された。「不利益」においては、意見を述べなかった場合に生じる不利益を想定して主張行動をしていることが記載されたカードを集めた。「欲求」においては、グループ活動において意見を言いたい、という個人的な欲求がまとめられた。

表5 自尊感情(低)／自己主張(高)の分析結果(下)

表札	代表的なカード
望ましさ	自分の考えも一応言ったほうが良いと思う
	自分の意見を述べる必要があるならそうするしかない
	言った方が良い
不利益	何か発言しないと場が持たなくなる
	意見を言わないと話合いが始まらないから
	意見を言わなければ周りに迷惑だったり多くの視点から意見をまとめられない
欲求	相手の意見や説明を理解したい
	意見を共有したい
	意見を提示したい
自信	自分の意見に自信がある
	自分の意見は正しいと思う
	意見をいうことは恥ずかしいことではない
貢献	自分の意見と相手の意見をぶつけることでより良いものに昇華する
	意見を比較するとよりよい意見が取り入れられる可能性がある
	自分の行動で少しでもよりよくなるのかなと思う
意見のそのものの肯定	人は人、自分は自分という考えがある
	自分の意見を自分の意見として持っている
	反対意見も貴重な意見のひとつだという認識がある
場の構築	自分が話しやすい空気が作られている
	率先して意見を言うことで発言しやすい空気作られる
	回数を重ねると意見を言えるようになる
要望	このような考えもあると知って欲しい
	他の人に自分たちと違った視点を持ってもらう
	一意見として頭の隅に置いた上で主張してほしい
責任	自分も話し合いの一部
	意見を言わないとグループにいる意味が無い
	話し合いに参加している誠意を見せるため
性質	言わないと気がすまない
	違っていたら素直に言える
	思ったことは口にしてしまう
評価懸念の無さ	他人に興味がない
	自分の意見は否定されてもかまわないし、否定されてもあまりいやだとは思わない

「自信」においては、意見に対して自信がある旨が記載されたカードが集取された。「貢献」においては、意見を言うことでグループや活動に貢献する／したいという内容がまとめられた。「意見そのものの肯定」においては、意見それ自体に価値があるという考えがまとめられている。「場の構築」においては主張をすることで、主張しやすい場が形成されることや、主張しやすい場があるから主張できる、と記載されたカードが収集されている。「要望」は、グループの他のメンバーに対する要望を、意見を表明することで叶えようとする内容が収集された。

「責任」には、グループ活動において意見をのべることがメンバーの責任の一旦であるという考えがまとめられた。「性質」においては、主張行動が個人のパーソナリティから生じている、という内容が収集された。最後に「評価懸念の無さ」では、意見をいうことで想定される他者からのネガティブな反応や評価に対して、主張者が興味関心を示さないというカードが集取された。

表6の自尊感情(低)／自己主張(低)群では、10のカテゴリーが生成された。「ネガティブな反応予測」では、自尊感情(高)／自己主張(低)群と同様、意見の述べることによって生じる周囲からの否定的な反応予測と、それによって生じるネガティブな感情(不安、恐怖、緊張)に関するカードが収集された。

表6 自尊感情(低)／自己主張(低)の分析結果

表札	代表的なカード
ネガティブな 反応予測	否定されるのが怖いから
	嫌われたくない
	質問されたり、批判されそうで怖い
スキルの不足	自分の意見がない
	相手に分かりやすく明確に話すことが苦手
	コミュニケーション能力がない
場の尊重	ことを荒げたくない
	波風をたてたくない
	自分の意見で場を乱したくない
権利否定	意見を言える立場ではない
	自分が話し合いに意見することは許されない
他者との同調	自分の意見を持っていても他の人の意見を聞くと流される
	周りに合わせようといった思考が生じる
	自分の意見よりも相手の意見を尊重してしまう
自信の無さ	相手の方が正しいだろうと思ってしまう
	自信がない
	自分の意見に自信がない
消極的な要望	目立ちたくない
	できれば話したくない
	注目をあつめたくない
怠惰	なんでと聞かれるのが面倒
	周りに合わせた方が楽
	めんどくさい
意見の価値否定	自分の意見には価値がないと思っているから
	話し合いは一方的な意見ではあまり意味がない
	意見を言っても何もかわらない
主体性の欠如	自主性がない
	主体性や積極性が欠けている
	主体性がない

「スキルの不足」では、自分の意見を生成したり、表現したりするためのスキルが不足しているという内容がまとめられた。

「場の尊重」には、自分が意見をすることによって、ネガティブな状況(例：話がまとまらない)を生じさせたくないなどの考えがまとめられた。「権利の否定」においては、自分自身が意見をいうに値しないという、過度に自己否定的な内容がまとめられた。「他者との同調」は、自尊感情(高)／自己主張(低)群と同様、自分の意見よりも相手の意見に流されてしまう、または相手の意見を尊重してしまう傾向がまとめられている。「自信の無さ」においても、自尊感情(高)／自己主張(低)群と同様の傾向が見られ、自分の意見に対する自信のなさについて記載されたカードが収集された。

「消極的な要望」においては、活動自体への消極的な関わり方が示された。「怠惰」においては、自分の意見を示すことの負担よりも、意見を示さない、周りの任せることによる負担のなさを優先する考えがまとめられた。「意見の価値否定」においては、自分の意見を提出しても変化が期待できないという旨が記載されたカードが収集された。最後に「主体性の欠如」においては、活動に取り組む上で、そもそも主体性が不足しているという内容がまとめられた。

以上がKJ法によって得られた各グループの主張行動の背景にある影響要因である。これらの分析結果のなかから、グループ学習にネガティブな影響を与えると想定される自尊感情(高)／自己主張(低)群と、自尊感情(低)／自己主張(低)群について考察していく。

考察

本研究では、個人の心理的性質と主張行動の関連性を検討した。相関係数がある程度示されたことから、心理的性質と主張行動には関連性があることが示唆された。しかし、関連の値が中程度に留まったことから、今回調査対象にあげた自尊感情以外の要素が主張行動に関わっていることが予想される。この点について、KJ法によって分類されたカテゴリー内容を基に検討する。

1) 自尊感情と関連する要因

主張行動の高群、低群にかかわらず自尊感情の関連性が指摘できるカテゴリーを表7にまとめた。

自尊感情との関連が指摘できるカテゴリーとして3点があげられる。1点目は「自信」の有無に関するカテゴリーである。2点目は意見を述べた際の反応に関するものとして「ネガティブな反応予測」や「評価懸念のなさ」、「信頼」、「低不安」、「経験」があげられる。3点目は「自分の意見」に対する肯定的または否定的な考えに関するカテゴリーである。これらは、自分自身または自分の意見、行動に対する肯定的または否定的な認知に関する内容がまとめられているため自尊感情との関連性が指摘でき、これらのカテゴリーが今回の調査で示された中程度の相関係数に影響しているものと考えられる。

9

表7 自尊感情との関連性が示唆されるカテゴリー

グループ分け	関連カテゴリー
自尊感情(低)／自己主張(低)	自信のなさ・ネガティブな反応予測・意見の価値否定
自尊感情(低)／自己主張(高)	自信・意見そのものの肯定・評価懸念のなさ
自尊感情(高)／自己主張(低)	自信のなさ・ネガティブな反応予測・意見の価値否定
自尊感情(高)／自己主張(高)	自信・意見そのものの肯定・低不安・経験・信頼

2) 自尊感情以外の要因

今回の相関係数を下げた要因、つまり自尊感情以外で主張行動に影響した要因について検討する。KJ方の結果から5点の要因が示唆されている。全ての群に共通するものとして、まず2点指摘できる。1点目は動機付けである。動機付けは、行動そのものを生起させる要因である。自己主張の高群であれば「欲求」や「性質」としてまとめられたカテゴリーであり、低群の場合は「消極的な要望」、「怠惰」、「消極性」としてまとめられたカテゴリーである。これらのカテゴリーは、主張行動をしたい、または主張をしたくない、主張をすることによって目立つことを避けたいなど主張行動そのものに対する動機付けに関連している。

2点目は他尊感情である。主張行動の高群であれば「貢献」、低群であれば「他者尊重」、「他者への同調」、「配慮」、「場の尊重」のカテゴリーとしてまとめられた内容である。高群の場合、意見を言うことが他者にも良い利益を見出すと言う考えが述べられている。反対に、低群の場合は意見を言わないこと、他者に合わせること、他者に譲ることで他者を尊重しようとする考えが見られる。他尊感情がアサーションのパターンに影響を与えることを指摘する研究があることから¹³⁾、学習場面における主張行動においても他尊感情が影響したと考えられる。

次に主張行動高群で見られた要因として2点あげられる。1点目は利益、2点目は規範意識がある。「利益」は自尊感情(高)／自己主張(高)では「期待」、「回避」カテゴリーとしてまとめられている。自尊感情(低)／自己主張(高)群においては「不利益」、「場の構築」、「要望」としてまとめられている。前者の高群においては、主張行動を示すことによって、何かしらポジティブな変化が生じるという「期待」や、主張行動を示さないことによって生じる不利益を回避したいという考えがまとめられている。同様に後者においても主張行動をしないことによって生じる不利益を避けたいという考えと、主張行動を示すことによって話しやすい場を構築できるなど、主張することによって他者に理解を求めるなど、ポジティブな変化を期待する内容が示されている。

次に「規範意識」は、自尊感情(高)／自己主張(高)では「ルール」、「前提意識」としてカテゴライズされており、自尊感情(低)／自己主張(高)群では「望ましさ」、「責任」としてまとめられている。前者では、主張行動は話し合いにおけるルールとして「すべきもの」である、または「するのが当然である」という考えが述べられている。これに対し後者は、主張行動は行った方が「望ましい」または、話し合いの参加者として主張する必要があるという責任感に関する考えがまとめられている。

最後に自己主張(低)群に共通してみられた要因が1点ある。自尊感情(高)／自己主張(低)群では「準備不足」、自尊感情(低)／自己主張(低)群では「知識やスキルの不足」としてまとめられたカテゴリーである。これらは意見をまとめられないや、意見を生み出すことが困難という話し合い以前の課題があげられている。

10 以上のことから、学習場面における主張行動においては自尊感情だけではなく、その他の要因が影響していることが本調査によって示された。図1では、アクティブラーニングの失敗原因の学生側の要素として「発言をしない」ことがあげられており、その背景要因としては「思考訓練不足」や「議論前提知識不足」が指摘されていた。このような指摘は本調査でも「準備不足」や「知識やスキル不足」として挙げられている。しかし本調査の結果、単に知識やスキルの不足だけではなく、自尊感情の高低の違いや、話し合いに対する利益意識、規範意識の違いなどが学生の主張行動に影響していることがわかった。

結論

本研究では、青年期のグループワークに注目し自己主張と自尊感情の関係性について調査を行った。その結果、グループ学習における自己主張行動においては、自尊感情の影響が示されたものの、中程度の相関に留まった。しかし本研究から、単に知識や学習スキルだけではなく、心理的要因が主張行動に影響していることがわかった。また、各群の主張行動の背景にある認知や特性の違いを把握することができた。

今後の課題としては、4点あげられる。1点目は、「グループ学習における主張行動尺度」の作成である。本調査では、アサーションに関連した尺度から、グループ学習場面を想定できる質問項目を使用し、調査を行った。しかし、質問項目が少なく十分にグループ学習場面における主張行動を拾い切れていない。そのため新たに尺度を作成することが第一の課題といえる。

2点目は、本研究で分類した各群に分類される人物のインタビューである。今回の調査では、自由記述による定性調査を行ったが、個人の記述内容だけでは判断しがたい内容も多い。記述された内容の背景にある主張行動への影響要因をより明確にするために、インタビューによる調査が必要と考えられる。

3点目は、自尊感情以外の心理的要因と主張行動の関連調査である。本研究によって自尊感情の影響が示唆されたものの、自尊感情以外の要素が指摘された。そのため、考察で指摘された他尊感情や利益に関する意識、規範意識、スキルに関する要素を踏まえて再度調査を行い、主張行動の背景要因の構造を分析することが課題としてあげられる。

4点目は、主張行動(低)群の行動変化にむけた介入の検討と実践である。グループ学習は、個人での学習とは異なり、複数の人間が相互作用することによって、個人では生み出せない「対話的で深い学び」を生み出すものである。そのためには、まず活動時に対話が生まれることが求められる。しかし、実際のグループ活動では、メンバー全員が活発に意見し合う場面は少なく、また保持することも難しい。学習を深化させるためにも、主張行動(低)群の行動変化に向けた介入方法の作成が今後の課題となる。

引用文献

- 1) 文部科学省 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」概要(2012) https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/09/10/1325048_4.pdf (アクセス:2020.09.27)
- 2) 文部科学省 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(2016) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (アクセス:2020.09.30)
- 3) 木村充 [ほか]「高等学校におけるALの視点に立った参加方授業に関する実態調査2015 第一次報告」日本教育研究イノベーションセンター(2015) <http://manabilab.jp/wp/wp-content/uploads/2015/12/1streport.pdf> (アクセス:2020.09.30)
- 文部科学省 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」用語集(2012) https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf (アクセス:2020.09.27)
- 4) 中部地域大学グループ・東海Aチーム「アクティブラーニングの失敗事例ハンドブック～産業界ニーズ事業・成果報告～」(2014) p3
- 5) 平木典子「改訂版 アサーション・トレーニングーさわやかな〈自己表現〉のために」金子書房(2009)
- 6) 桜井茂男「ローゼンバーグの自尊感情尺度 日本語版の検討」筑波大学発達臨床心理学研究12巻(2000) pp.65-71

- 7) Rosenberg, M. "Society and the adolescent self image. Princeton University Press". (1965)
- 8) 星野命「感情の心理と教育」児童心理 24 (1970) pp.1445-1477
- 9) 金子和弘 [ほか] 「アサーション行動尺度における信頼性・妥当性の検討」生活科学研究 32 卷 (2010) pp.57-66
- 10) 玉瀬耕治 [ほか] 「青年用アサーション 尺度の作成と信頼性および妥当性の検討」奈良教育大学紀要 50 卷 1号 (2001) pp.221-232
- 11) 柴崎裕子「思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について」カウンセリング研究 31 (1998) pp.19-26
- 12) 川喜田二郎「川喜田二郎著作集 (第5巻) KJ 法一渾沌をして語らしめる」中央公論社 (1996)
- 13) 石川 満佐育 [ほか] 「他尊感情と自尊感情が自己表現に与える影響」筑波大学心理学研究 29 (2005) pp.89-97